

# アウシュヴィッツ収容所の生存者が語る

——女性作家ゾフィア・ポスミイシの文学証言——

Urszula Styczek

(受付 2007年5月10日)

現ポーランド領にあるアウシュヴィッツ強制収容所に関して、すでに第47巻1号（アウシュヴィッツの経験のない女性作家ゾフィア・ナウコフスカ）と2号（悲劇的な生存者タデウシ・ボロフスキ）で論文を執筆した。その続きとしては、今回はボロフスキと同様の運命であったポスミイシについて論じる。

アウシュヴィッツ収容所の被害者である女性作家たち、ゾフィア・ポスミイシ (Zofia Posmysz, 1923-)、セヴェリーナ・シュマグレフスカ (Seweryna Szmaglewska, 1916-1992) とゾフィア・コッサク (Zofia Kossak, 1890-1968) の中から、本論では日本で比較的良好に知られている作家、ポスミイシについて述べる。その三人の作家においては、それぞれのアウシュヴィッツのイメージと語り方が異なり、「収容所の運命」も異なる。この三人は同じように収容所を経験したにもかかわらず、確かなのは、彼女らがともにアウシュヴィッツというこの恐ろしい現象について非常に徹底的に述べている点である。さらに、それぞれの作家としての戦後の運命もまた異なっているが、一方で共通点もある。すなわち、この三人はアウシュヴィッツの悲劇を、様々な形の作品を通して、訴え続けたのである。シュマグレフスカとコッサクは戦争直後に語り始めたが、ポスミイシは終戦から17年後に最初の「収容所文学」の作品を書いた。また、道徳についての立場もそれぞれの作家で異なっている。コッサクはカトリックの信者としてアウシュヴィッツの出来事を判断しているが、その他の二人は宗教的要素を全く加えない。叙述の手法もそれぞれの作家で違っていて、シュマグレフスカの『ビルケナウの煙』(1945, *Dymy nad Birkenau*) はもっとも「ノンフィク

ション」に近い「事実の文学」の作品であり、コッサクの『深淵から一収容所からの思い出』(1946, *Z otchłani. Wspomnienia z lagru*)は「ノンフィクション」と「フィクション」の中間の作品であるが、ポスミイシの『パサジェルカ』はもっとも「フィクション」に近い作品である。しかしその三人の作家の共通点は自分の経験に基づいて書いたことである。

この三人の中から、なぜポスミイシの作品を選んだのかと、終戦から17年間の経った後に彼女が書いた小説によって、文学作品におけるアウシュヴィッツという問題が改めて提起されたからである。シュマグレフスカとコッサクと比べ、ポーランドの文学世界で殆ど知られていなかったポスミイシという名前は、1962年に発表された一つの作品、『パサジェルカ<女船客>』のために、急に評論家たちの間で話題となった。

### 1) ポスミイシの文学活動

ゾフィア・ポスミイシの生涯と文学活動についての情報はとても少ない。彼女は1923年にクラクフ (Kraków) に生まれた。戦争中、地下教育を受けながら、ケーブル工場で働いていた。地下活動参加を理由に1942年に逮捕され、クラクフのナチス・ドイツ刑務所へ下獄された。直ちに、囚人番号7566を与えられてアウシュヴィッツに輸送され、ついでドイツ領内の収容所であるラーフェンスブリュック (Ravensbrück) とノイシュタット＝グレーゼ (Neustadt-Gleze) に移されて、合計3年にわたる強制収容所生活を送った。ドイツ降伏後、彼女はポーランドにもどり、青春を取り戻すべくワルシャワ大学のポーランド語学科に学び、1951年に文学修士として同大学を卒業した。ポスミイシは卒業後ジャーナリストとしての仕事に入り、1952年からポーランド放送局でルポルタージュやラジオドラマを書き始めた。1945年に彼女は『バルセンの死刑執行人を知っている…』(Znak katów z Balsen...) という収容所からの回顧集でデビューした。1960年から1976年にかけて、彼女はアンジェイ・ムラルチック (Andrzej Mularczyk) とヴワディスワフ・ミルチャレック (Władysław Milczarek) と共著で、当

時最も人気となった『イエジォラーニ村にて』（W Jezioranach）というラジオドラマに関わった。そして、ジャーナリストの仕事によりポーランド全国を旅し、一般の国民の日常生活の問題に直接触れた結果、様々な長編小説や短篇小説を書くことになった。しかし、彼女が最も良く知られたのは、強制収容所をテーマとして文学作品を書いた「収容所文学」の作家としてである。彼女の文学の特徴を示すと、主人公たちの心理・態度を独特の視点から精密に叙述していることである。彼女は、「収容所文学」の作品でも、そうでない普通の現代小説でも、主人公たちの反応、考え方、振る舞いなどを精神的な角度から描いている。

彼女のもっとも有名な作品である『パサジェルカ＜女船客＞』（1962, Pasazerka）という小説も、最初はラジオドラマとして書かれたものである。それによって彼女を鬼才と高く評価したアンジェイ・ムンク（Andrzej Munk）監督によってテレビ映画化された。ムンク監督は彼女自身の手で映画シナリオにすることを勧め、共同で執筆したが、映画撮影途中でムンク監督が事故死したために、ムンクの友人、ヴィトルド・レシェヴィッチ（Witold Reszewicz）が完成するといういわくつきの映画となった。この映画は1963年のカンヌ映画祭で国際批評家賞を得て、日本でも公開され、その強烈な印象で話題を呼んだ。なおポスミシの原作が長編小説として出版されたのは1962年である。彼女は『パサジェルカ』を書いた時、まだ若い無名の存在であったが、この小説によって直ちに現代ポーランド文学の代表的な作家となった。この作品は、日本語<sup>1)</sup>を含めて、ロシア語、ハンガリー語などの多くの言語に翻訳されている。60年代以降、『パサジェルカ』は演劇およびオペラとして上演された。そのあとも、ポスミシは収容所の体験を小説化して、より優れた「収容所文学」の作品を書いたが、これらは『パサジェルカ』ほどの人気を得なかった。

以降1980年代の半ばまでは、主に強制収容所の経験に基づいていくつか

1) 佐藤清郎訳『東欧の文学、7巻 ポスミシ「パサジェルカ」他』恒文社、1973。

の小説を書いたが、『パサジェルカ』と同じ程度に評論家と読者の注目を集めた次の長編小説は、『アドリア海の夏休み』(1970, *Wakacje nad Adriatykiem*)であった。また、『この同じM先生』(*Ten sam doktor M*)とその他の二つの短編小説を含めて、1981年に出版された短篇小説集では、第二次世界大戦の占領時代と強制収容所というテーマのもとで、自分自身の過去に対してどのような立場を取ることが可能かという問いを投げかけていた。それから、自分の意見を他のアウシュヴィッツの元囚人と比較していた。

ポスミシはまた、「収容所文学」の作家としてだけでなく、現代小説家としても活躍している。次のような小説を書いた。例えば、『微気候』(1975, *Mikroklimat*)、『木は木に似ている』(1977, *Drzewo do drzewa podobne*)、『値段』(1978, *Cena*)、『未亡人と愛人たち』(1988, *Wdowa i kochankowie*)などがある。さらに、短編集『森の中の駅』(1965, *Przystanek w lesie*)、映画台本『小さい』(1970, *Mały*)もある。

1995年にオシフィエンチム・ブジェヂンカの国立博物館 (*Państwowe Muzeum w Oświęcimiu-Brzezince*) の出版社から出た『アウシュヴィッツ強制収容所の囚人たちの回想録』(*Wspomnienia więźniów obozu KL Auschwitz*)の中にポスミシの短編小説が収録されている<sup>2)</sup>。これは「ザンゲリン<女歌手>」(1982, "Sängerin")である。

ポスミシは収容所の経験者には二つの態度があると指摘している。その一つは、永遠に心のなかに存在し続けるあの恐ろしい思い出とともに生きること、つまり収容所経験を過去の事として話題にしたり、生き残った囚人たちの会合に参加したり、経験のない若者に伝えたり、また、博物館になった収容所についての最新情報を集めたりすることである。もう一つ

2) 『アウシュヴィッツ強制収容所の囚人たちの回想録』(*Wspomnienia więźniów obozu KL Auschwitz*)の中で、本章の第二節で論じるシュマグレフスカの短編小説も収録されている。これは「反乱の叫び声が上がる」(*Wybuchnie krzyk buntu*)である。

はあの過去の出来事を完全に忘れようとして、全く話をせずに、収容所で亡くなった友人や親戚のお墓参りもしないという態度である。

ポスミシは前者の立場に立つ。戦争期が彼女の若く、最も美しい時代に当たったので、この収容所の思い出の外に生きられない、この思い出から逃げられないと確信しているからである。アウシュヴィッツの回顧から自分を切り離すことは全く不可能であると考えたポスミシは、戦争直後まだ学生としてアウシュヴィッツの思い出をノートにしたが、その時点では日記や小説を書くつもりはまだなかった。ただ、収容所についての情報はあらゆるものを読んだり、臨時のガイドとしてアウシュヴィッツ収容所を案内したり、毎年「死者の日」である11月1-2日には、亡くなった親戚のためにかならずオシフィエンチムの博物館を訪れたりしていた。職業として文章を書くようになって、すなわちラジオ放送局に勤めていた時も、思い出を小説化するつもりはなかった。ようやく、60年代になって、ラジオドラマと映画シナリオといった形で、『パサジェルカ』などの著作を書きはじめた。戦争直後における作家の気持ちは、1970年に出版した『アドリア海の夏休み』の中に明確に表現されている。主人公である<私>は1945年6月、半年前に解放されたアウシュヴィッツに設けられることになったオシフィエンチム博物館の開館準備を手伝うために、オシフィエンチムに向かう。そして、そこに住みそこで働くことしかできないと悟る。この態度は、彼女を含む当時の若者の絶望的な感情をはっきり表わしていた。収容所で<育てられて>、<大人の世界に強制的に連れ込まれた>無邪気な青年たちは、この恐ろしい収容所の世界しか知らず、この世界にしか住めないのである。

## 2) 『パサジェルカ』以外の作品

主な作品である『パサジェルカ』の問題について論じる前に、「ザンゲリン<女歌手>」と『アドリア海の夏休み』を簡潔に紹介する。この二つの作品の共通点は、アウシュヴィッツ収容所の現実が囚人たち、被害者の立

場から描写されている点である。これは他の作家によって書かれた「収容所文学」の作品とも共通する。「ザンゲリン」のプロットがすべて戦時中に進行し、『アドリア海の夏休み』の主なプロットが戦後進行するにもかかわらず、主人公たちの回顧はしばしば収容所の場面に戻る。一方、この二つの作品とは異なり、後に論じる『パサジェルカ』のナレーションでは、現実を描写する際に、囚人の立場からでなく、加害者であるドイツの女性 SS 親衛隊の立場から行われる。

### (1) 「サンゲリン」

1982年に書かれた「ザンゲリン」という短篇小説は、アウシュヴィッツ収容所から数キロ離れたブディ (Budy) という村での、女囚の SK (karna kompania więźniów, 独 Strafkompagnie <刑罰の部隊懲罰>) の仕事について語っている。実は、SK の惨めな歴史は、「ザンゲリン」で描かれている彼女らから始まった。ある日ポーランドの女囚のコマンドから一人の囚人が脱走し、その結果、そのコマンドは全員非人間的な状況で畑の仕事をしながら、三ヶ月間アウシュヴィッツの外のある、収容所で過ごすことになる。当初400人がいたその半分以上は病気、過労、看守やカポの拷問で亡くなった。この<ザンゲリン>という、あるオペラ歌手についての物語の最初の部分で、ポスミシは自分がその SK の目撃者として、女囚の看守 (独 Anweiserin, anwajzerka) をはじめ、SS 親衛隊の下士官 (Rottenführer) の道徳的に腐敗していく過程を非常に細かく描いている。さらに、その体の弱い歌手は歌がうまく、特権的な女囚となったために、他の女囚たちが嫉妬に燃えて、彼女を殺そうとするところを描いた。

この物語のナレーションは、他のポスミシの小説と比べると、とても新鮮であり、生々しい、そして登場人物の心理の分析はまったくない。そのかわりに、残酷な場面が多く、叙述のスタイルとしては第二節で論じるシュマグレフスカの文体に近い。つまりルポルターージュに近い「事実の文学」の方である。

(2) 『アドリア海の夏休み』

ポスミイシは1962年に『パサジェルカ』を出版してから8年後、再びアウシュヴィッツ収容所の主題を取り上げ、『アドリア海の夏休み』を発表した。この小説は、主人公たちの偶然の出会いという設定のために、『パサジェルカ』の粗筋に類似しているが、物語の主眼はアウシュヴィッツの悪夢を元囚人である〈私〉が語るところにある。

ポスミイシは、収容所における加害者と被害者の間の相互関係を叙述することによって、両者の心に道徳的墮落がどのぐらい浸透したか、細かく描いている。さらに、この極端な状況で、人間が人間であることが、どこまで可能であるか、どの段階まで可能であるかという疑問に答を探している。

この小説の内容を簡単に紹介する。過去についての叙述と現在の叙述が混ざりあって現れ、時として気づかれないこともある。〈私〉という、40歳に近いアウシュヴィッツの元囚人が、夫ともう一人の若い女性と共にアドリア海で夏休みを過ごし、毎日ビーチに通っている。ポーランド語を使うその三人は、外国人である年取った男性一人と三人の女性の注目を浴びている。この二つのグループはあまり近寄らないが、互いに相手の存在を意識している。ポスミイシは、両者にとって過去を思い出させる〈魔法の単語〉である〈ドイツ語〉という表現を使わず、〈この言語〉(Język)という表現だけを使う。中立国であるユーゴスラビアでポーランド語とドイツ語が理解できる主人公たちが登場するのは、象徴的で特別な意味を持つ。〈この言語〉は、およそ20年前の恐ろしい過去を回顧させる。現在の出来事に過去の思い出が織り込まれる。〈私〉はその四人のドイツ人の中で中年の女性を見分けて、ベルタ (Berta) という名を聞き、アウシュヴィッツ時代のベルテル (Bertel) という自分の上司 (物品倉庫の囚人看守, Pani Starsza Magazynu) を思い出している。〈私〉はその女の姿を見、ドイツ語を聞いて、また強い日光を浴び、少しめまいがして、その結果戦時の出来事の妄想にふけることとなった。彼女がアウシュヴィッツを回顧する叙

述は、とても乱暴であり、断片的で、幻想的である。ナレーターが熱に浮かされて話しているように感じられる。これは、現在の時点における、強い日光のためであるとも感じられ、同時に、過去の時点において、病気や恐怖に苦しみ、更にはその後良心の呵責に苦しんだことによっても感じられる。

この〈私〉は、アウシュヴィッツで長時間にわたって冷たい水の中で仕事をしたために、子供が出来ない身体になっていた。そして〈私〉は、アドリア海と一緒にいる若い女性を見て、自分の悲劇を思い出すのである。

戦時中17歳ぐらいであった〈私〉は、ドイツ語ができたので、ベルテルのところでは書記 (Sekretarka) の仕事をしていた。すなわち特権のある女囚であった。さらに、四桁の数字の〈古い番号〉を持つ囚人、つまり収容所の長い経験をもつ囚人として、職のある他の囚人や SS 親衛隊員によって尊敬されている。自由に動いたり、収容所の制服でなく一般の服装を着たりするなどの特権を享有する〈私〉は、自分と同じ〈古い番号〉のプタシカ (Ptaszka, 〈小鳥ちゃん〉) を見守っている。プタシカは20歳ぐらいで、戦前にバイオリンの学生であったが、収容所社会を支配する厳しい規則に従うこともできなく、体が弱くて、神経質で、何時も何かに怯えている。絶望的な気分で、「自分はもうここからは出られない」という強迫観念につきまとわれている。プタシカは、大学教育を受けており、また〈この言語〉 (ドイツ語) の研究者であった父親からの影響もあり、ドイツ語を完璧に話したが、しかし自分の人生をほとんど諦めていた。偉い職を持つ〈私〉はいろいろなコネを利用して、プタシカのバラックをよく訪れたり、彼女に追加の食糧を渡したり、精神的に支えたりしている。女性用の収容所で、ドイツの女看守をはじめ、外国人の (すなわちドイツ人でない) カポ、一般囚人にいたるまで、同性愛関係が流行っていた。〈私〉がプタシカのところを訪ねるのもその関係によるのである、と同性愛関係を持つ上司は期待している。しかし、本当は〈私〉の行動の動機は異なっていた。絶望の底にいるプタシカを助ける強い〈私〉は、実は一回だけプタシカに



よって命を救われたことがあり、その恩返しとして、ずっと彼女を見守ろうとしていた。さらに、その気持ちは何となく収容所の外側にある自由な世界に属しているものでもあった、つまりもはや収容所にはない人間的なものである。これは、人間的な感情を完全に失わないということであり、また人間性に対する郷愁でもある。すなわち希望の感情である。一人だけでもアウシュヴィッツという地獄から出してやることができればと思った<私>は、バイオリンが上手なプタシカを女子用の楽団（Orkiestra, オーケストラ）の指揮者に紹介してバイオリンを弾かせた。しかし、その試験に合格したプタシカは、翌日確実に死に至る畑の仕事のコマンドに逃げた。誇りをひどく傷つけられた<私>は、数か月プタシカのことを忘れたが、ある日死病にかかって病棟に入院していたプタシカからメッセージが来た。そして、彼女に会いに行った。彼女に最後の親切を尽くすために、プタシカを病院から出すことに決めた。「死ぬことは難しくない。患う方がもっと難しい」とプタシカは病院で苦しんでいる。だが、もはや希望のない病気に罹ったプタシカは<死のバラック>（Blok Dwudziesty Piąty, 25号バラック）に移され、翌日ガス室に送られる予定であった。<私>は夜中に走り回って、死にかかっている他の女囚を探し、彼女をプタシカの代わりに病棟から取り引きして、プタシカに人間的な死に方をさせた。<死のバラック>の構内に横たわったプタシカは「私は死ぬことは恐くない。でも、無理に死なせられることは耐えられない」と泣いている。自由な世界では死は自然であり、当然のことであるが、収容所は囚人たちをありとあらゆる方法で強制的に<死なせる>（śmierć zadana）場所であった。例えば、ガス室での窒息死、銃殺の死、過労死、飢餓の死、医学実験による死であった。これはもっとも恐ろしい死に方である。

<私>はアウシュヴィッツを生き残り、再び1945年6月にオシフィエンチム市（戦前と戦後のアウシュヴィッツ市の名前）を訪れて、収容所の公文書館で働こうとする。彼女は、人が最も美しい年齢である若い時期に囚人であったため、もはや自由な世界に生きることは出来なくなった。生き

残っても、霊の世界に絶え間なく、引き戻されたのである。

『アドリア海の夏休み』は、次に論じる『パサジェルカ』とは異なり、アウシュヴィッツを囚人の側から描いて、所内で戦を持つ上位の女囚たちの間の関係に注目している。ポスマイシ自身は<古い番号>であったので、その関係を詳しく理解してきた。

さらにこの作品は、過去と現在が織り込まれていて、そのアウシュヴィッツにおける恐ろしい過去を現在の時点から清算する試みであるとは受け取れないであろう。

「ザンゲリン」も、『アドリア海の夏休み』も、『パサジェルカ』に比べると、収容所の日常生活についての描写がより多く、またそれらはより恐ろしく写実的である。たとえば、収容所に送られたばかりの<私>は、チフスに罹ったとき、同じベッド(長さ2メートルと幅1.5メートルの棚に六人の病人が横たわっていた)にいた女囚の体がドブネズミによって齧られた場面を見ている。あるいは畑の仕事をしている女囚たちがその重労働に耐えられず、カポの手で殺されている場面も見ている。

ポスマイシはそのような残酷な背景を描きながら、主な登場人物である<私>とプタシカの行動、性格を分析している。しかし、この分析の部分は、小説のところどころにおいて理解しにくく、互いの関係も分かりにくい。それ故に、『パサジェルカ』の方が、これら二つの作品よりも優れている。

### 3) 『パサジェルカ』の考察

ポスマイシの代表的な小説である『パサジェルカ』と『アドリア海の夏休み』に「ザンゲリン<女歌手>」という短編小説を加えた三つが、彼女の「収容所文学」の代表作品である。しかし、本論では主に『パサジェルカ』における問題を論じることにする。他の二つの作品の問題には最小限触れるに留めたい。なぜかという、その二つの作品には、上で述べたように、文学的な価値はあまりないからである。それぞれの作品においてナ

レーションが異なるが、これらの中でもっとも興味深い作品は、アウシュヴィッツを加害者の立場から描いている『パサジェルカ』である。最初はこの作品における問題を考察する。

ポスミイシは『パサジェルカ』<sup>3)</sup>の中では、<女船客>という日本語の題名通りに、ヨーロッパから南アメリカに向かう大西洋上の「ハンブルク号」という豪華船上での元アウシュヴィッツ女看守、今はドイツ外交官夫人リザ・クレチメル (Liza Kretschmer) と元女囚であったマルタ (Marta) という女性の出会いを巧みに描きだしている。小説は、この突然の再会による二人の主人公たちの心理的な動揺を過去との対置のなかで描写していて、特にドイツ人のリザのより複雑な気持ちを表わしている。戦争中、マルタは被害者の立場から加害者のリザを見ていたが、現在はリザの方が自分より弱い立場として見られると確信している。さらに、船上で、妻リザの過去が明らかになった時の夫ヴァルテ (Walter, ワルター)<sup>4)</sup> との心理的な葛藤、そして、ヴァルテルとアメリカ人ブラドレイ (Bradley, ブラッドレー) との議論のなかで、作者自身は、ナチスの犯罪の前に主観的には<誠実>であろうとした主人公リザも、決してその責任を免れないことを示している。その上で、ナチズムを単なる歴史的過去としか見まいとする傾向への批判を加えているのである<sup>5)</sup>。

「収容所文学」の物語はたいてい囚人の視点から展開していく。つまり元囚人 (<収容所の被害者>) の作家であるポロフスキ、シマグレフスカと、『アドリア海の夏休み』でのポスミイシ) は自分の経験、気持ちを再現して、

3) 本論で使われているテキストは『東欧の文学7巻 ポスミイシ「パサジェルカ」他』、板東宏、吉上照三の解説「ポーランドと戦争文学」、恒文社、1973、pp. 278-419である。それ以上はページ番号を指摘しない。全部の引用は佐藤清郎訳である。

4) 日本語訳では、Bradley はブラッドレーであるが、ポーランド式にブラドレイとする。また同様に、Walter は英語式にワルターとなっているが、著者の本論ではポーランド語式あるいはドイツ語式にヴァルテルとしている。

5) *ibid.* pp. 25-26による。

敵の立場と気持ちには直接触れずに書いている。ところが、『パサジェルカ』の叙述は、『アドリア海の夏休み』とは異なり、全く逆の視点からアウシュヴィッツの現実について語っている。すなわち、加害者であるリザの心境から被害者であるマルタのことを回顧している。ポスマイシは自分を看守の目で見えて語っている。

### (1) 加害者と被害者との間の無言の会話

戦争からおよそ10年後、ドイツのある港とリスボンを結ぶわずか二日間の船上の旅についての話のなかに、突然に現れた、死んだはずの元囚人マルタとの出会いによる、戦時中ナチス・ドイツの政策に服従したりザの心境の変化が、精密に展開されている。経済学者であるヴァルテル・クレチメルは戦時中、忠誠な軍人であり、ヒトラー党 (NSDAP) の党员ではなかったが、反ファシズムの団体の員でもなかった。西欧の戦場で捕虜になって、戦争にあまり積極的に参加しないように努力していた。戦後、彼はリザが恐るべき過去を持っていたことを知らずに彼女と結婚し、10年間の幸せな結婚生活を送っていた。しかし、このような幸福な二人の人生は突然に消えそうになる。アウシュヴィッツで死んだはずの囚人の出現によって、リザの過去の罪が明らかにされる不安から、彼女は夫にその過去を少しずつ告白しはじめたのである。この恐ろしい過去によって、今まで目前に広がっていた明るい将来は一瞬で崩れようとするのである。マルタの存在はリザにとって良心の呵責となっている。元囚人の出現は、悪夢のような過去を忘れようとしていたりザに、その過去をなおさら深く思い出させることとなった。

ただし、ポスマイシは非常に繊細にリザの姿を描いており、彼女を完全に人間の良心を失った SS 警察官としては描いていない。人間は悪魔であるとは言えないが、リザも戦時中、収容所について何も知らずに若い SS 警察官としてアウシュヴィッツ看守の任務を与えられた。彼女はヒトラー思想が理想的であると信じて最初夢中でこれらに従っていた。しかし、ア

ウシュヴィッツにしばらくいて、現実を観察し、彼女の理想が大変な間違いであると分かったあと、もう静かな生活へ返る道はないと絶望的な状態に陥った。ナチス・ドイツの命令に従わないと、自分は死刑に処されるであろうと分かっていた。若いドイツ人のリザは収容所で自分より意志の強いポーランド人に出会い、この二人の間に生き残りをかけた心理的な<ゲーム>が始まる。リザは自分の命を守るために、女囚たちに対して厳しい訓練をさせるのであるが、マルタに対してだけ、そうできない。かえって、精神的に独立しているマルタの意志がリザの注目を引くことになる。特に、18歳のマルタに対して優しい態度をとったり、理由なしに何回も彼女の生命を救ったり、自分の意志でマルタに婚約者と会う機会を与えてやったり、彼女の行動は、あたかも自分が<収容所の摂理>であると感じているかのようである。すなわち、リザはマルタの運命を握っていると自覚していたのである。何故彼女だけを見守っているかといえば、リザは収容所全体が非人間的な場所であることに対して、自分が人間であることを自分に説得することを望んでいるからである。ひと言で言えば、収容所で絶対に勝つはずのないマルタが何の譲歩もしない態度によって、結局精神的に勝っている。さらに彼女は、地獄のような収容所の生活を生き残るだけでなく、10年後に、元看守としての振る舞いが正しかったと思い込んでいたリザの前に再び姿を現しながら、リザの収容所の過去も暴かず、公に告発することもしない。リザにとっては激しい告発より、表情に表れる無言の軽蔑の方が辛いのである。マルタは二日間絶えずリザをじっと観察してただけである。そして、この目付きは訴えに満ちていた。アウシュヴィッツで弱者の立場に立たされたマルタは、今は完全に精神的にも、身体的にも自由な人間になり強者になっている。まだ収容所にいた頃、『『生きることに執着すると、人間は奴隷になる』』と囚人のマルタは言っていた。戦後はこの二人の役割が逆になり、リザはずっと恐怖の奴隷となり、マルタは自由な人間となった。この二人の女性、戦時中の加害者と被害者の間には非常に精巧な心理的な勝負が行われている。これがボスマイシの物語

の特徴である。小説の中でマルタは一言も発しないし、彼女の性格は外面的な態度だけから紹介され、彼女の姿は唯一語り手であるリザの目から描写されている。さらに、元囚人の沈黙は実際にとってもダイナミックであり、果てしのない告発である。

## (2) 「犯罪の黙過」と「贖罪の意識」

ポスミイシの小説には道徳的なくつかりの問題が見出せる。たとえば、ポーランドの戦後文学に頻繁に出てくる戦争責任の問題、あるいは戦時中一般のドイツ人はアウシュヴィッツのような収容所のことを意識していたかという問題である。さらに彼らドイツ人がこの小説の書かれた時点、つまり終戦から15年後、この犯罪に賛成していたかどうか、また自国民の犯罪を贖罪したことを認めたかどうかなどである。しかし、このモラル的な問題についてポスミイシ自身が直接に述べるわけではない。戦時中、対立する立場を取った二人の登場人物、つまりアメリカ人で元兵士、現在は記者であるブラドレイとリザの夫で元ドイツ軍兵士、現在は外交官であるヴァルテルの間でこのことが話題にされる。二人はリザの過去を知らないの、収容所のテーマについて何となくただ理論的に考えるのみである<sup>6)</sup>。

この問題がポスミイシによってどのように提出され、展開されているか、本文中のいくつかの断片からみる。次はヴァルテルの言葉である。

「…あなたのご意見に必ずしも私は賛成しません、ミスター・ブラドレー、必ずしもね。いくら単純化した言い方だが、あなた流の〈犯罪の黙過〉として規定できるようなテーゼには特に賛成できない。あなたのお考えでは、この〈犯罪の黙過〉にこそドイツ国民の最大の罪があるというわけですね。心理的な影響という点では、フィヒテでさえその理論をうち樹てるときには思いもかけなかったような、あの

6) ちなみに、この〈犯罪の黙過〉と〈贖罪の意識〉という問題は戦後から50年以上経ったにもかかわらず、まだ日本を含めて様々な国で、最後まで解決されていない。アウシュヴィッツの虐殺は嘘であったというような言説は世論の口からまだ消えていない。

きわめて大きな…<偉業>に劣らないほどだ。しかしこの理論をひきだす前提はほぼ認めるとしても、私はあなたのご意見に必ずしも賛成できない。

数千万の人命を犠牲にしたあの第二次世界大戦に人類を投げこんだのはいったい誰か、それをすっかり忘れてしまって、ただドイツが受けた屈辱ばかり云々し、さらに悪いことに本気にその屈辱を信じている。そういう連中にあなたがドイツでお会いになった、そのことは私も信じます。それが新しい妄想じみた思想を培養するのに恰好な地盤であり、おっしゃるように神秘主義に毒されたドイツ精神がそうした方向に傾きやすいということも認めます。

ダハウのそばに五十年も住んでいて、ダハウで何が行なわれていたか全然知らなかったとあなたに語った人の話は確か本当だと思おう。ドイツ人の多くはこんな場合—<知らなかった>と答えるでしょう。屍体焼却炉の煙が立ち昇っているときでも、処刑された人々の遺品を<配給>として受け取っていたときでも、そう、彼らは知らなかったのです—それをどうして今になって知らなきゃならないのです？ <歴史の歩み>のおかげで、あの暗い出来事がやっとはるかに見通せるようになり、ただぼんやりと無関心に眺められるようになったこの今になって！

歴史に対して感情的な態度を誰からも要求してはいけない。いいですか、もはや歴史 なのです！いや、歴史でさえもない。歴史的なおとぎ話だ（略）あそこで行なわれたこと、それがもつ現実性をどうしても認めたがらないでいるという説明には私も賛成だ。いやそれどころか、彼らが<知らない>ということの中に、そうとははっきりいいきれないものを私は感じてさえいる。いわゆる哲学の<内属的なもの>に動かされて、あそこで行なわれたことを正当化しようという無意識な志向がありはせぬかと。—これはドイツ心理学の連中が好む用語ですが—なにしろ現実がどのようなものであれ、あらゆる現実的なものは理性的であり、必要である（ヘーゲルのいったように）という形而上学的な確信はドイツ人なら誰でも持っているのですから。

だから、ドイツ人の心の中には犯罪の黙過と贖罪の意識がみごとに共存している一種の共生体がある、というあなたのご意見は認めざるをえない。もっとも私のこういう判断には、あなたと同様、東独の連

中を考慮に入れてはいませんが。あなたのおっしゃる通り、東独の連中とくはくアウシュヴィッツ>という言葉聞いたときも驚かなかったなどと自分たちに<都合のいいことばかりいう>のですから。

あなたはドイツ人の性格を判断なさるのに勿論このことを考慮に入れてはいないです ね。あの連中は考えてることと言うことがまるで違う、などとよくいわれるのもまるっきり根拠のないことではないですから。(略)ドイツ人の心に確かに犯罪の黙過と国民精神復活の渴望とが同居してもいい。

(略)強制収容所にいたことがない人間には、収容所の生活も、囚人のモラルも、心理も理解できない。この言葉こそ私のテーゼの基礎です。そう、ドイツにいなかった人間にはドイツはわからない、私もあなたにこうも申し上げますね。人口八千万、面積五十五万五千平方キロ、このドイツ全土そのものがいわば強制収容所だったのですから」

ヴァルテルは、自分を含めて、ドイツ国民の立場を弁解している。この<犯罪の黙過>が国民の間に広がった理由は、彼らが真実を知らなかったからである。ナチスのプロパガンダによって、ドイツ人は隣国による犠牲になったと考え、この「受けた屈辱」を「信じて」いたので、ドイツ軍がしたこと賛成した。「なにしろ現実がどのようなものであれ、あらゆる現実的なものは理性的であり、必要である」というヘーゲルが言った形而上学的な確信に従うドイツ国民の立場は、ヴァルテルのこの弁解の論拠ではかなり弱いものであると思われる。つまり、彼はいわゆる<盲目的な服従>というドイツ人の性格を論証として使って、この<犯罪の黙過>を正当化しているが、この立場に人間性はないと考えられる。<知らない>という口実の問題の解決ではなく、やはり問題のはじめである。現在も他の民族に対する我々のこのような無関心は、実は、他の人間を殺すところにまで至っている。ポスミシの作品に現れる加害者におけるモラルの問題は、ナウコフスカの『メダリヨヌイ』、特に「シュパンナー教授」という作品にも出てくる。第七章ではこれについて詳しく論じる。

ヴァルテルの論証に従うと、彼はかなり厳密な論拠を取っている。自分



が収容所を経験していないにも関わらず、「このドイツ全土そのものがいわば強制収容所だったのですから」と言い出している。つまり収容所で囚人たちが送っていた生活を彼も送っていたはずであった。ブラドレイが彼を責めることに対して、次のように答える。「強制収容所にいたことがない人間には、収容所の生活も、囚人のモラルも、心理も理解できない」という結論が正しくない。しかし彼のそのような言い方は、確かにそこだけ取り出せば、正しいが、ヴァルテルの論拠として説得力はないと思われる。彼にとって、収容所のような形をしたドイツは、厳重な規制によって統制され、自分の国民を収容所の囚人と同じように扱う国家であった。一般人はナチス・ドイツに服従しないと殺されるだろうし、本物の強制収容所へ送られるであろう。ヴァルテルは、論争のなかでは、ドイツ人の行動はドイツ人にしか理解できないし、また外国人が彼らのこの〈犯罪の黙過〉という態度を判断することはできないと強調している。

さらに、ブラドレイはもう一つの問題を取り上げている。過去は過去であるが、現在のドイツ人は自分の〈汚れている過去〉をどう思うのかと、ヴァルテルに質問を投げかけている。ヴァルテルのような考え方は、確かに一般教育を受けた、典型的なドイツ人の考え方であった。ヴァルテルの長く複雑なモノローグから、この問いに対する答えになるとと思われるいくつかの文章をここで引用しながら、ポシミシの考え方を検証する。

ドイツの一般市民を代表するヴァルテルはアメリカ人の前で自分の国民を守ろうとする。彼は、「ドイツ帝国の目的のもつ犯罪性を理解できたものが何人いたでしょうか？」という疑問に対して、その答えは自明であるとする。ヴァルテルは、一般の国民にはその目的がはっきり分からなかったとするのである。さらに、ドイツ人の一部だけが犯した犯罪を弁解するために、次のように述べている。「ドイツの敗北を願った人たちはかなりいた。」彼は、収容所に送られたドイツの囚人たちをこの〈かなり〉の数に含めなくとも、なお一般市民の多数が敗北を願っていたとするのである。そのうえで、それでも彼らを勝手に〈犯罪者〉と呼んでも良いだろうかと

ヴァルテルは大きな疑問を投げかける。彼によれば、ドイツ国民全員を「犯罪者」と「犠牲者」という二つのグループだけに分けることは決して正しいこととはいえない、とても不正である。「私が問題にしている人たちは、犠牲者でなかったということだけで犯罪者だ、あの制度の共犯者だとあなたがきみついている人たちの中にもいたということです」とヴァルテルは言い続ける。つまり、「あなた」＝アメリカ人によれば、ナチスの犯罪に抵抗しなかったドイツ人は「共犯者」ということになる、しかし、それは誤りである。決して、中立の立場を取ることを欲した一般市民、すなわち国民の大半を「犯罪者」として考えることはできない。ヴァルテルは次のように考えている。

あなたはドイツ人を二つの部類に分けたが、私は三つに分けたい。強制収容所に入れられた人たち、それを支持した人たち、それにその他の人たちという具合に。そして私はその他の人たちを弁護しますね、いちばん大きな役割を演じたのはこの人たちですから。この人たちはファシズムの運動にも、その制度の御用軍隊にも加わらなかった。国民の大部分はこうした人たちだが、その受身な態度故に目立たず、ひっそりして非難されているのです。

ヴァルテルはその三つ目のグループの一人として、戦争のはじめから「敗北を願っ」ていた。さらに、「とても勝てそうもない」ドイツの敗戦を待っていた。その予感を持っていた彼は、第二次世界大戦の前に親衛隊の大佐であった伯父の影響で「<祖国を護って>と<祖国のために>」 („za ojczyznę” i „o ojczyznę”) 召集を待たず、志願兵として戦場に赴いた。さらに自ら SS 親衛隊に入らず、普通の兵士 (Wehrmacht) となることを望んだ。

その当時、私はまだ強制収容所の鉄条網の向うで何が起こっていたのか知らなかったし、ニュースでも洩れてはこなかった。釈放されて出て来たものも幾人かはいただろうが、黙して語るものはいなかった。今では世界じゅうが知っているアウシュヴィッツのガス室も、<発

見>されたのはずっと後になってからだ。

彼は自分が「汚れた組織の一員にならなかった」ことをとても自慢している。ブラドレイとの対話の中で彼は親衛隊に入らなかったことを何回も強調している。そしてポスマイシが、この言葉を彼に繰り返し言わせることにより、彼の弁解のことばは逆の結果をもたらしていると思われる。ヴァルテルの立場と取り上げる証拠がかなり弱いにも拘わらず、彼は絶え間なく一般の軍人の立場を守ろうとする。さらに、次のような証拠を取り上げている。彼は同じドイツ軍の者であったにもかかわらず、親衛隊の警察官の態度について語るときに、自分がまるで違う軍隊に属していたかのよう

に述べる。

私は親衛隊員たちの実際の行動を見たのです—ウクライナの二つの村落を完全に<殲滅する>さまを。そのとき私は自分にいきかせた、どんなことをしてもここから脱出しなければならない。たとえ完全に脱出できなくとも、少なくともこういう汚らわしい行為から、この<兄弟>の部隊から、できるかぎり遠ざからねばならないと。統帥部は同じだから、親衛隊員がやったことに対しては、全師団が責任を負っている。

彼は戦場で足を撃たれ、長く入院したが、退院したあとは終戦まで西部戦線で戦っていた。実は戦争中にドイツの勝利のことを考えたことはなかった。しかし、当時この考えを誰にも打ち明けることはできなかった。だから、とても辛かったのである。ブラドレイと話すときにはじめて自分の悩みを打ち明けた。当時、つまり戦時中に「ドイツではこの告白ができなかった。ヒトラーのために闘うのがいやで脱走したのだ、といえなかったのだ。呪いを恐れていえなかったのだ。」

ヴァルテルは自分の行動を一緒懸命に正当化しようとするが、ブラドレイにはこの証拠がなかなか理解できない。この論争を取り上げているポスマイシはアメリカ人ブラドレイのことばを通して、自分がヴァルテルの考

え方に賛成していないことを示しているようである。ヴァルテルの伯父は戦時中人殺しをしたが、戦後になって罪を許され、恩給を受けて田舎で静かな生活をしている。「だからこそ、ほくはく犯罪の黙過」といったんです。何よりもまず、今のドイツ人の態度—<犯罪の黙過>を責めたいのです、つまり戦時中に軍人が積極的に戦争に参加したことより、その後、戦後になって彼らがなおも<犯罪の黙過>を続けたことの方がもっと恐ろしく、許されないことである、とブラドレイはヴァルテルを責める。戦時中なら、自分の命を守るために黙っても許される。「あのときなら何も知らなかったということもあろう。知りたくなかったということもありえるだろう。知っていて受難者になりたくなかったこともあるだろう。」しかし、すでに恐れのない現在、平和なときに次のような態度を取ることはもっとも恐ろしい。「いま何の強制もないのに、あなたの叔父さんのような人にくんにちは」というのは、<ハイル・ヒトラー>というのと同じじゃないですか。」ブラドレイは現在のドイツの社会に対しては、「連帯責任をちょっとも感じず」、そして「少なくとも連中の存在を許し」、また「社会的ボイコットという形ででも抗議を全然示そうとせず」というように責め続けている。このような論争は永遠に続きそうな感じである。最後にヴァルテルは、普通のドイツ人がなぜ、犯罪に対して<知らない>と答えるのか、つまり<犯罪の黙過>という態度を取るのか、そして戦争の話をあまりしたがるのかということに対して、はっきりとした答えを出さない。戦争についての全ての事実はまだ話されていないからであるかも知れない。ブラドレイの疑問はリザのような存在にしか解くことはできない。しかし、彼女の過去は、船でマルタに出会うまでは夫を含めて、誰にも知られていなかった。

ヴァルテルははじめて妻の話を聞いたとき、彼女の言葉を信じようとはしなかった。リザの姉、ハッセ夫人 (Frau Hasse) がアウシュヴィッツで働き、リザ自身も重要なポストに就いていたという事実をどのように判断すればよいか、最初彼には判らなかつた。妻に対して怒りながらも、彼女の行動の動機を分析しようとする。それによって自分の行動も弁解しよう

としているのではないだろうか。「きみは若かった，だからあの＜強大化計画＞というイデオロギーの餌食になったのだ。あの計画が行きつくところがどんなところか予想できたものは実際は少数だった。」ドイツ人は夢中でヒトラーの演説を信じて，盲目的に彼に従っただけである。「だから私にはきみを裁くことはできない—そんな権利なぞない，きみよりはるかに経験豊富な連中でさえあざむかれたのだから。精神の麻痺状態，大量の精神異常状態だったのだ。」戦争の経験のない，若い女性の行動を正当化しようとするヴァルテルには，彼女の行為を裁く権利はない，と筆者も思っている。彼もほとんど同じことをしたからである。収容所の仕事ではなく，戦線で戦ったという違いだけである。しかし，人殺しに協力していたのは，事実である。

しかしながら，筆者はこの夫婦の態度を非難するために，この問題をもっと広い側面から考察する。自分の国を守るのではなく，他の民族の自由や権利を奪い，さらに彼らの命を取ることさえするという，あの＜強大化計画＞の正当性を示すことによって，自分の態度を弁明するのは全く不十分である，と筆者は主張する。20世紀だけを取ってみても，現在まで，多くの国々でそれぞれの＜強大化計画＞の名のもとに行われた戦争は，罪のない他の民族に悲劇をもたらしてきたのである。第二次世界大戦だけでなく，朝鮮戦争，ベトナム戦争，湾岸戦争，そして今回のアフガン戦争などは，それぞれの侵入された国民に苦しみをもたらしただけである。そして，人類史を見ると大抵の場合強い国が弱い国を侵略したと言えるが，その中で今世紀の戦争は世界の他の国々の沈黙の賛成により，すなわち＜犯罪の黙過＞によって行われている。

ポスマイシは，アメリカ人とドイツ人の間の論争，さらにクレチメル夫婦の間の話し合いを描く時に，かなり分かりにくい，説得力の弱い証拠を取り上げている。とくにヴァルテルの議論には，自分の立場を守る根拠が弱いし，また連合国を代表するアメリカ人によって責められた彼の立場も崩れそうな感じがする。60年代前半に書かれた『パサジェルカ』で戦争に

反対していた普通のドイツ人の立場を攻撃し、ドイツ国民全体に戦争の責任があるとするのは、軽率な推断であると筆者は思う。戦時中、彼が取った道以外に他の選択のなかった若いヴァルテルが責められることは、現時点から見ると、ポスミシシの作品の欠点であると思われる。しかしながら、この小説が書かれた時代はまだ冷戦の時であった。さらに、ポーランドとドイツの間に政治関係の正常化の条約が結ばれる前の時代でもあった<sup>7)</sup>。それ故に、まだ作品には反ドイツの要素、そして社会主義的なプロパガンダの要素も見られる。

### (3) 元加害者の実在の不安、リザの姿

アウシュヴィッツの加害者たちの責任、現在における彼らの存在不安、そしてアウシュヴィッツに関する事実を隠す理由などの疑問が『パサジェルカ』に現れてくる。これらに対する答になるのはリザの姿であると筆者は思う。この点ではポスミシシの小説はきわめて興味深く展開されている。終戦から数年が経って、リザは収容所のことを忘れようとしているが、被害者との偶然の出会いによって彼女の一生の努力が崩れてしまう。

『パサジェルカ』におけるこの問題、つまり加害者であるリザと被害者であるマルタとの間の相互関係について論じながら、リザの姿について述べる。さらに彼女の悩みの原因を考察してみる。アウシュヴィッツについての他の小説と異なって、『パサジェルカ』の物語は、元加害者であるリザの立場から描かれている。マルタは、彼女の影に立っているような人物であり、アウシュヴィッツにあった苦労については一言も言わない登場人物である。彼女があたかもリザにおける良心の呵責の影であるように読者は感じる。マルタは何の訴えもせず、ただじっとリザを観察しているだけであ

7) 1970年12月にワルシャワでブランド首相 (Willy Brandt, 1913-1992) は、1966年に始まった<東の政策> (Ostpolitik) の次の段階でドイツとポーランドの間に両国の正常化の条約を署名したことによって、ドイツの東の国境を認めて、東欧の隣国との友好関係を強化したのである。

る。この突然の出会いによってリザは自分の罪を意識しはじめ、自分を責めはじめる。戦後になってから、まさに加害者と被害者との相互関係が反対となったように、アウシュヴィッツの加害者が自分の良心の被害者となり、一方、被害者は元の加害者を責めて彼らの良心の加害者となっているのである。

妻の過去を知らない夫ヴァルテルは、船に乗った後からリザの不思議な態度を見て、少しずつ彼女の〈収容所の物品倉庫〉 („magazyny obozowe”), 〈労働収容所〉 („obozy pracy”) での仕事についての情報を集めはじめる。10年間の結婚生活の間この過去を隠してきた可愛い妻が、戦時中〈婦人部隊〉 („kobiecte formacje”) で、つまり SS 親衛隊員としてアウシュヴィッツで働いていたことが分かり、ヴァルテルは在ブラジルドイツ大使館での仕事にこれが影響することを心配する。彼は最初、この若くて優しい女性にそんなに暗い過去があったことを信じない。しかし、リザが徐々に自分のことを明らかにしていくにつれ、この問題の良い解決方法を探し求める。

リザは戦時のプロパガンダの犠牲者となって、ヒトラーを信じていた。彼女は自分の行動を次のように弁護している。

私は祖国の安全を守るために入っただけです……親衛隊大将ポールがいていた—《アウシュヴィッツは泥沼だ、ドイツ強制収容所の恥辱だ。この泥沼をきれいにできるのは親衛隊の優秀分子だけである》と。私はいちばん困難なところへ行くのが自分の義務だと思ったのです。

リザはアウシュヴィッツに着いて最初の頃、熱心に SS 看守の義務を果たそうとしたが、直ぐにその〈泥沼〉の本当の意味が判るようになった。そしてその〈ヨーロッパの地獄〉 („piekło Europy”) である収容所を〈きれいにする〉という表現の本当の意味が判ってきた。〈きれいにする〉あるいはポーランド語訳を使うと、〈全治させる〉 (uzdrowić) というのは実は〈できるだけ速く殺す〉という意味を示していた。しかし、ヒトラーのプロパガンダに巻き込まれたリザは、二重の意味を意識せずに夢中でこの

使命を果たそうと考えた。自分がその<地獄>、<泥沼>に入ってしまった、収容所の実際の目的が何であるのか疑いはじめた。「強制収容所についての私の知識、ここへ来るとき確信していた国家社会主義の敵にとって矯正所の存在が必要だという理論、それらは私がここで現実に見たものとまったく相反してしまった。」愛国主義者としてアウシュヴィッツに到着したりザは、最初のうちとても当惑した。それから彼女は、「アウシュヴィッツは奇形だ、だからこそ古い模範的な収容所にならって正常な形に改善する必要がある」と考えるようになり、それまで教わった通りに看守の義務をしっかりと果たさなければならぬとも考えている。「それとも、あの理論を発展させた次の段階に来ているのか。そうだったら……私は恐怖にふるえた」、つまりこのような恐ろしい場所はあるのか、矯正所の存在が必要だという理論の続きとして創られ、外へ理想的な観念を宣伝しながら、所内でナチス・ドイツの汚れた政策を実行していた、とりザは考えている。すなわち、「もしも未来の世代のために清掃しておくのだという名目で数千万の生命を抹殺するのが歴史的な必然だということを認めるなら、どうして一人の人間の殺害に反対することができるのだ？」もしその理想的な観念や理論のために、他の民族の無名の囚人たちを殺しても、誰も反対しなかったら、いったいこの理論は何の意味があるのか、とりザは疑問に思った。また、この理論によって、一人の人間の生命はまったく価値がないものとなるので、その一人のために戦い、反抗しても、それは無駄な行動であると彼女は悟るようになる。それにもかかわらず、リザはマルタを救うことを望んだ。

リザは新人であり、評判の良い女子親衛隊員として、上司の信頼が厚かった。彼女は「上司の信頼に応えようという決意にみなぎって」て、「野望に燃えたぎっていた。彼女は実績を上げうる腕がある」と高く評価された。他の看守の行動に倣わず、つまり「自らの手で懲罰を加える—囚人たちを殴りとばしたり、何かの罰を加えたりした」ということをせずに、リザは聖書のピラトのように、すなわち道徳的責任を避けて、次のことを



よく強調していた。「私はそういうことが嫌だった。私はサディストじゃないから。私の手は汚れてはいない。一度だって囚人を殴ったことがない。」リザは他のSS親衛隊員の行動を基準にして、自分の行動を肯定的に判断している。彼女にとって、肉体的な罰を加えることは、＜サディスト＞的な加虐趣味であるが、自分がマルタを含む女囚たちに精神的な拷問をかけることは、非難すべき行動ではない。

夫ヴァルテルと話すとき、自分は犯罪を犯していないと主張する。「アウシュヴィッツが殲滅収容所の汚名を受けたって、私には何の関係もありません。」また次のような自分を守る言葉を繰り返す。「彼らを選ぶのは私じゃない。彼らの生死は私の手の動きに関係はない。」

リザは、自分が看守の義務を果たせるかどうかということについて思い悩み、また収容所の目標を理解できるかどうか疑いながらも、一人の囚人の命を救おうとした。ポスミィシは、その姿と彼女の悩みを独創的な手法で描いている。リザは自分がマルタの目で見られ、責められているように思っている。この描き方は＜二重の鏡＞とも言えるであろう。この二人が再会した時、何も言わないマルタはリザを観察することのみによって、リザに心の中で昔の苦しみを思い出させ、そのことにより再び苦しませる。しかし、新しい、今度の苦しみの質は以前と異なり、リザの夫との関係にまで広がっている。

ここで『パサジェルカ』のナレーションは注目に値する。現在、つまり終戦から10年以上経った時点で、夫婦の会話の中で、アウシュヴィッツについての物語が行われている。その話からリザとマルタとの相互関係が現れてくるが、ここで強調しなければならないのは、話全体がリザの立場からのみ描かれているという点である。すなわち、あまりにも一方的に述べられているので、どちらの方が正しかったかという点について判断することができるのは読者のみである。自分の行動を必死に弁護するリザに対して、黙り続けるマルタは十分にその自分の＜沈黙の態度＞を弁護すると思われる。言葉は必要ではない。

リザの話によって彼女の姿、それからこの二人の女性の相互関係を分析してみる。1943年にアウシュヴィッツに着いたばかりの若いリザは、収容所の外で行われる仕事の担当に任命された。女囚の中から書記の仕事をする女囚 (szrajberka) という助手を選ぶ権利を得て、ドイツ語ができるマルタを選択した。ここでリザとマルタの間の〈ゲーム〉が始まる。ほとんど同年齢の二人の間で、友情のような、特別な関係が結ばれるかもしれないとリザは考えていたが、誇り高いマルタはそうは思わなかった。アウシュヴィッツについての事実が分かった時、リザはこの〈ヨーロッパの地獄〉から誰かを救い出さなければならないというような良心の呵責を感じて、収容所の原則を破ったりして、マルタを助けようと決心した。マルタの収容所においての生活を楽にするために、リザは「あの娘を私たちの〈プロミネント〉にしたいんです」(chcę ją wychować na więźnia „U”) という希望を持ちはじめた。つまり「〈プロミネント〉というのは、特権を与えられた囚人のことなんです。そういう囚人にはいい仕事が与えられる。収容所内を自由に行き来でき、集団的処罰も免除され、囚人ナンバーで呼ばれなくてもすむんです。」しかしその代償として、このようなく特権を与えられた囚人には、次のようなことが要求されている。「よく働き、収容所当局に忠節を尽くすことです。」特権の代わりに自分と他の囚人たちを裏切らなければならないのである。

リザは、忠誠を尽くすことを断ったマルタの態度の原因が全く理解できなかった。「私はあの女には親切だった、いいえ、私はあの女の収容所の神でさえあった) にもかかわらず、マルタの方からは反発だけがあった。「あんなところでも彼女は幸せだったんです！ ほかに誰があんな幸運に恵まれて？ あの女は幸せだったんです、私のおかげで！ あんなところにながら、あの女は愛がもてたんですから。それも私のおかげで、私の、私の……」マルタを幸せにするためにリザは、収容所の規則を犯して、彼女の恋人と逢わせることにした。アウシュヴィッツの男子収容所にいた彼女の婚約者タデウシ (Tadeusz) を、自分のコマンド、つまり物品倉庫

(Effektenkammer) で書記の仕事をする囚人 (szrajber) として雇った。それによって、リザはこの二人に顔を合わせるチャンスを与えたのである。久しぶりに再会した二人の婚約者はリザに感謝したが、彼女によって計画された次の出会いに対し、タデウシは反対した。「いまや彼の眼にはありありと憎悪の色が燃えていた、そして軽蔑の色も。」彼はリザの態度における本当の〈好意〉が徹底的に分かるようになった。すなわち、この二人に〈デート〉のチャンスを与える代わりに、彼らから何か要求するのではないかとタデウシは心配した。さらに、愛する者の命は最も大切なものであるので、タデウシは「愛は生活と結びついている」と言い、危険な再会を断った。

リザの本当の〈好意〉、あるいは言い換えれば〈助ける好意〉に注目してみる。全く選択することができないマルタにとって、リザは、自分が神のような存在であり、〈収容所の摂理<sup>8)</sup>〉であると言い続けながら、むしろ収容所での自分の仕事、さらには自分が収容所にいることさえも合理化しようとしている。彼女は他の女囚に尊敬されて、感謝されたと思っていた。特に、マルタからの尊敬と感謝の念がリザにとって重要であった。「そう、言葉だけでなく心が通うことは、特に私が恐怖と絶望のどん底にあった最初のころは私にとって実に重要なことだったのだ。それにうち克つのに、あの女は私を助け、私を支えてくれた。」〈あの女〉を助けるというリザの思い込みは、実はただ〈あの女は私を助け〉てくれるという考えであった。マルタを保護し、彼女を守ることによって、リザは自分の態度を弁解しているだけである。

加害者と被害者の間で友情のような関係を上手に結ぶことができるとリザは期待していた。「他の囚人たちとの連帯感があの女を私から引き離しているのだ、私の目的の達成をさまたげているのだ。あの女の中にあるこの感情に打ち克たなければ私のほうが負けてしまう。」マルタを救うための、

8) 佐藤清郎訳によって *opatrność* ということばは〈神〉であるが、筆者の意見では〈摂理〉ということばの方が良い。

彼女に与えられた精神的拷問が絶対に必要であることをリザは確信していた。「私はあの女と闘い、同時にあの女を護った。」リザによって救われるために選ばれたので、マルタが感謝の気持ちを持つことは当たり前のことであると考えた。リザ看守は「あの女の感謝を得るため」、また「あの女を自分にひきつけてお」くために、そして「ただわずかにドイツに生きた体の中に溶けこめるものだけが生き残れるのだ。何とかしてそうすることをあの女に教えてやらねば」と考えていた。「でも……それは悪いことだろうか？ それを、あの女を助けようとしたのだったとしても……」、と自分に抗弁している。

しかし、リザの〈愛弟子〉(ulubienica) となったマルタがリザ看守に対するはっきりした協力を拒否したので、リザは彼女を別の方法で利用することにした。マルタに婚約者との逢引きを約束したと同時に、彼女を次のように心理的に恐喝していた。「マルタから協力するという沈黙の承諾をえた。」二人の女性の間で〈心理的ゲーム〉が続く。「私が示す感謝も、私によって与えられた若干の特権も、あの女にとっては何の意味もなかった」とリザは思い込んでいたが、これは実はマルタにとっては大変なことであった。彼女は看守の〈愛弟子〉であったので、他の囚人たちに無視されたりし、この厳しい収容所の社会から仲間外れにされていた。

マルタは暗い顔をして歩いていた — 女囚たちのグループにあの女が近づくと、彼女たちは必ず黙ってしまう。自分を避けている、あの女ははっきりとそれを感じていた。女囚たちの眼には、あの女は〈私の〉まわしもののようにみえたのだ。じゃ私自身は……私自身はあの女を獲得する闘いに勝った。じっさいにあの女は〈私のもの〉になったと信じこもうとしていた。

リザの〈所有物〉になるように思われたマルタは、絶え間なく看守とのゲームを続けただけである。これは絶対に負けない、絶対に看守の〈所有のもの〉、あるいは奴隷にならないという態度であった。次第にリザはこのことを意識するようになった。「あの女は私をあざむいたのだ。われわ

れをあざむいた。ワルター、あの女はわれわれよりもはるかに狡かったのです。規律正しく、何でも忠実に実行して私を信用させ」、トリザは心の中で自分を裁判にかけ、自分がヴァルテルの前にいることを想像しつつ語った。「それとも私の戯れに気づき、私を知りたがっていることを見抜き」、トリザは思い込み、マルタを恐れたので、これを見せないために彼女を精神的に苦痛を与えた。収容所の中でこの二人の間に不思議な駆け引きが行われている。肉体的な加害者は、精神的により強い被害者に負け、被害者となる。それとは逆に、囚人の立場から見ると、絶対に被害者であるはずのマルタが、加害者である看守の眼から見ると＜精神的な加害者＞となっている。リザは心の中で、自分が悪いと判断しながら、その気持ちを絶対に外に見せない。この＜強さ＞は彼女の弱点となっている。追跡されるように感じ、個人の秘密が全部ばれてしまった。「あの女が他の誰よりも、(略)よく私のことを知っているなんて、不思議なことだ。どうしてそんなことに？あるいは私があの子を監視していたように、あの女が私を見守っていたためだろうか？しかし、なぜだ？」

ここでリザは自分に重要な質問をする。「あの女は何の目的で私をつけているのだろうか？」彼女の答、あるいは言い換えればポスミシの論証を考察してみる。＜人間的なもの＞という表現はこの論法によく使われている。しかし、この全く＜人間的なもの＞でないアウシュヴィッツで＜人間的＞ということばはふさわしいだろうか。それでは、＜人間的なもの＞というのは、何であろう？リザは頭の中だけでヴァルテルと話をしている。

「当時、私は一あの女は私の中の何か人間的なものを暴露し、利用できるものなら利用したいと思っているのだと考えていた。あの女は別の立場から、私があの子を獲得しようとしたように私を獲得しようと闘っている、私と同様に、私の中に人間的なものを探している。(略)」

「きみがあの子の中にある人間的なものを押しつぶしたように(略)」

「あなたは＜人間的＞という言葉に＜人間に固有な＞という意味をもたせておっしゃっている、それに敢えて反対はしませんが、私が子供

のときから教わった道徳の本では、この言葉は無力と不完全の同意語だったわ。人間的なんて窮屈な境界を越えることを私たちは教わってきました。(略)

私はあの女に人間的に対してきたので、あの女の中にある人間的なものを押しつぶすことなんて出来なかった。囚人である女は単なる〈番号〉にすぎず、(略)少なくとも私はあの女に人間として対してきた。私は人間的だった。だから、だからこそ、私はあのとき、マルタの人間的なくわだてにだまされたのだ。(略)あの女は私の弱点をあばき、良心の呵責を受けることなしに、その弱点を利用するために私の中の人間的なものを探した。それも、私があの子の善意を一忠実といってもいい」

リザは自分の言動の中では、現在の意味におけるヒューマニズム的、つまり〈人間的なもの〉を探している。言い換えれば、これは〈人間に固有な〉ものである。すなわち、考えることのできない動物的なものではなく、人間だけに固有のものを指しているのである。〈人間的なもの〉の現在の意味は、戦前のナチス主義的な教育の時期とは、全く正反対の意味を持っている。すなわち、当時の意味で〈人間的〉というのは、*ślamazarny*、つまり〈愚図な〉、〈のろのろした〉、〈不活発な〉、そして〈決断力のない〉<sup>9)</sup>、さらに *mazgajowaty*、つまり〈泣き虫〉、〈のろま〉、〈涙もろい〉などの状態を意味していた。そのような人間になってはいけないと教えられたリザは、〈人間なんて窮屈な境界を越えること〉に努力していた。当時の教育によって、ドイツ人は特別な民族であり、〈超人〉であるとされたので、先に述べた意味で、自分における〈人間的な〉弱点を越えなければならなかった。しかし、リザがマルタに現在の意味で〈人間性〉、つまり自分の〈弱さ〉を見せたのは、彼女の失敗であったと、リザは思い

9) 佐藤清郎訳によって *ślamazarność* ということばは〈無力〉であるが、筆者によると、〈愚図なこと〉〈のろのろした状態〉などがポスミイシの小説によりふさわしいことばである。さらに、*mazgajstwo* ということばは〈不完全〉ということばより、〈泣き虫の状態〉などの方がより適切である。

込んでいた。彼女の思い込みの分析を続けると、心の優しさ、不活発な行動、そして囚人たちの犯罪に対する親切な決断などのようなリザの性格が実は、彼女の欠点として暴かれたのである。それを暴いたマルタは、今度はこれらを自分のために利用したのである。リザは自分の行動の犠牲者となっている。

リザ看守にとってマルタのうちで最も怖いものはその視線であった。裁く眼であり、リザの心を徹底的に見つめる眼であった。恐ろしい眼、狂暴な眼。女囚が言葉を使わなくとも、リザはその眼で彼女の感情を理解することができた。病気になったマルタは入院させられたが、これは同時に生命に危険をもたらすことであり、死刑の宣告と同じ意味をもつものであったので、リザは彼女を病院からバラックに移した。その時、婚約者の運命を心配して。「その眼には深い絶望が浮かんでいた」、また彼女の眼に狂暴の色、哀願の色が現れた。

しかし、マルタがバラックに移された本当の理由は別にあった。国際視察委員会に囚人たちの生活条件を見せるために、看守が信頼できる女囚を見せなければならなかった。マルタはその一人であった。それが分かったマルタは眼だけで語っていた。「一言もいわなかったが、確かに彼女は語ったのだ！（略）彼女の眼にはあれほど冷笑とかくしおおせぬ皮肉がこもっていたのだ。

どのようにしてこの誇り高いポーランドの女囚にうち勝てばよいのか。「次の手段は恐喝であり、その次に残されていたのは恐怖（テロル）だけだ、もはや自分にとってまったく不必要になったマルタを他の収容所に移そうという決心は、一種の恐怖の手段というほかはない。」アウシュヴィッツの任期を終えたら、他の収容所でより高い地位につくことが決められたリザは、その唯一の手段である恐怖として、マルタを婚約者から離し、精神的に彼女を虐め続けようとした。しかし、その後すぐマルタは、アウシュヴィッツの地下組織の一員であるタデウシの婚約者として、石炭庫（ブンカー、bunkier）に入れられた。「あの女の運命は決まり、私は何もできな

かったのだ。あの女はドイツの敵ではなかったのか？」マルタに対する自分の恐怖を乗り越えながら、その行動を口実にしてブンカー（独房）からもはやマルタを助け出そうと思わなくなったリザは、しかしその数日後に再びマルタの命を救ってしまった。「恐るべき死からあの女を救ってやったのはこの私なのよ」。病人や病弱者をガス室へ送るための選別は、＜ローマ帝国のオリンピック＞と同じように女囚に競争をさせ、＜勝った者は生き残り、負けた者はガス室に送る＞というルールで行われる。リザは選別の担当となった。突然、ブンカーにいたはずのマルタを女囚の間で見つけた。「あの女は私を見ていた。そう、初めから私は誰かの視線を感じていた。私には全女囚が私を見つめているように思えたのだが、じつはあの女の視線だったのだ。その視線の中に、私は嫌悪、憎しみ、軽蔑……そして勝利をみた。」地下運動の努力で独房から出されたマルタは、ふたたびリザの前に、良心の呵責として現れた。ドイツの敵を軽蔑したはずのリザ看守は、自分がその敵に軽蔑された。リザにはマルタの行動が分からなくなった。なぜそんなに軽蔑されるのか？「感謝しないことに対しても。私を、この私を憎んでいることに対しても……あの女はさあ、お好きなように、とでもいわぬばかりにふてぶてしく、蔑むように、挑むように私を見つめていた。」この「祖国の敵、呪わしい敵」であるマルタは救われたが、「私はあの女をまた救いました。いわばその点を最終的に確認し、徹底的な自分の敗北を感じるためでした。」この＜自分の敗北＞というのは、何であろうか。それは「それなのに、あの女は私に感謝さえせず」であった。リザ看守がマルタに求めたのは＜感謝の気持ち＞だけであった。だが、たしかにその気持ちは普通の人間的な同情の気持ちでなく、上下関係あるいは強くいえば奴隷を扱う関係に近い気持ちであった。リザには、自由と基本的な人権を奪われた女囚は、「それはもはや人間ではなかった。揺すっても動かない死んだ人形だった」のように見えた。人間的な感情もなく、バラックや収容所中を走り回っていたドブネズミをも恐れないマルタは、死んだ人間のようにもはや何も感じていなかった。「もはやねずみを恐れていない。ね



ずみに注意を向けていないのだ。まるで病院の庭の屍体のように、ねずみにまるっきり平気だった。」リザの言葉を借れば、マルタの「内部がすべて死んでくこと」(proces degeneracji)、つまり精神的な墮落がはっきり見えたのは、リザが彼女に二回裏切られた時であった。二人の男囚が落とした秘「密書簡 (gryps) をポーランド語からドイツ語に訳したときマルタは、これを、リザ看守が参加した選別についての情報ではなく、哀しい詩として紹介した。そして、三歳くらいまでの子供たちを連れた母親たちの、大きな輸送車がアウシュヴィッツに到着したとき、マルタはユダヤ人の赤ん坊を乳母車で隠して命を救ったこともある。リザ看守に対する誠実、忠実の気持ち、そして彼女ら二人の求める<奴隷関係>を破り、裏切り、憎んでいた。「あの女が私を憎んでいること、あの女の姿が私にとって堪えがたいように、私の姿もあの女にとって堪えがたいということも私は知っていた。しかし私は逃げなかった。私があの子を恐れてい」た。結局、マルタは完全に勝ってしまった。書記の仕事を断り、他の収容所に移ることもなく、おそらく終戦までアウシュヴィッツに残された。この二人の最後の会話は次のようであった。『看守殿、失うべき何物もないものは自由です。生きることにばかり執着すると、人は奴隷になります……』とマルタは自分の行動を説明している。生命以外にもっと大切なものはなく、その命を守るために人間は何でもできる。しかし、逆にその命を奪われそうな時になったら、人間はそれ以上は恐がらなくなる。すなわち、再び何でも出来るようになる。リザはこのことを悟った。「あの女は自由だったのだし、事実、自由である！ 鉄条網や犬や親衛隊員たちに囲まれていても自由なのだ！」自由だと考えていた自分は自由ではなく、この女囚に克服されたのである。

戦後になってマルタはまるで別人となった。英国の国籍を持ち、スコットランドの訛りで話しているマルタは、「ある平和擁護英国委員会の活動家」(działaczka jakiegós brytyjskiego Komitetu Obrońców Pokoju) であった。ポシミシは『バサジェルカ』を次のシーンで終える。

彼女はマルタの立っている欄干のほうに歩いて行った。五歩ほど手前で立ち止まり、執拗に、挑むように鋭く見つめつづけた。その視線を避けることはできなかった。マルタは彼女のほうを向いた。初めて、その眼はリーザのほうに向けられてはいたが、どこかリーザの頭上を見ていた。やがて、急に二つの視線は激しくぶつかり合った。

しばらくの間、二人の女はお互いに黙々と見つめ合っていた。ワルターは遠くからマルタの顔を一冷やかな軽蔑をたたえた顔を見た。そして、マルタがやがて自分の行く手に立つリーザをまるで不潔なもの避けるように、穢らわしそうに避けて、振り向きもせずに先へ歩んで行くのを見た。

十数年ぶりの再会は、＜黙々と＞終わってしまったが、戦時中と同様に、言葉を交わす代わりに視線だけが交わされた。この＜冷やかな軽蔑をたたえた顔＞だけが相変わらず、十分にマルタの気持ちを伝えていた。しかしその再会は、全く別の意味で、リーザに利益を与えた。収容所の中でも、そして戦後15年間も、リーザは恐怖の中で生きていた。しかし、戦後の恐怖は以前のものとは異なり、彼女の過去が暴れるという恐怖である。ヴァルテルと結婚してからずっと、彼が妻のアウシュヴィッツでの犯罪を知ることが心配してきた。やっと新しい生活がこの二人の前に広がったときに、無口なマルタが現れた。言葉で訴えないマルタ、船にいる彼女の存在だけがリーザの幸せそうな未来を壊してしまった。今までは夫は妻の過去に全く関心を持っていなかった。戦時中は普通の若い女性として戦争を過ごしていたと思っていたが、事実を聞いて自分の出世が壊れそうになりつつあるのを知り、リーザと別れることを決心した。さらに、リーザは結婚相手の今までの意識が分かるようになった。夫と別れようとする場面で次のように述べている。「あなたはあの女のいった『生きることに執着すると、人間は奴隷になる』んだということを私にわからせようとなさった。あの女のいう通りだったわ。十年間<sup>10)</sup>、私は恐怖の奴隷でした。自分の愛を失うことを恐

---

10) 佐藤清郎訳には＜十四年間＞とあるが、これは間違いである。

れていたのです。でもいまは、私は自由です。」彼女の暗い過去が明らかになったので、それ以上は恐れるものはなくなった。さらに、夫の真の顔が分かるようになった。妻の愛より自分の出世の方が大事であった。

ここではポシミシは非常に興味深い、異論の多い問題に触れている。今まで隠されていた戦争の犯罪が明らかになると、相手つまり配偶者、友人、親族はその事実をどのように受け入れればよいかという問題である。暗い過去が終わったので、これを忘れようとして未来に向けて赦せばよいのか、あるいはその過去は現在と未来につながるものであり、それを忘れてはいけない、それを赦してはいけないのか。ヴァルテルはリザを赦せない。なぜかという、妻がただ元 SS 親衛隊であったからではなく、戦時中彼女がその仕事をした結果、戦後になって自分の外交官としての鮮やかな出世に悪い影響を及ぼすからである。

ポシミシの小説はあいまいなところで終わっている。この後もまだクレチメル夫妻は一緒に暮らすのかどうか、ブラジルに着いてからリザは元 SS 親衛隊員であった姉のところに住むことになるのか、夫と一緒に住むのか、それは読者には分からない。

#### (4) アウシュヴィッツという極限的状况における生活の条件

ポロフスキ、シュマグレフスカと異なり、ポシミシは、収容所における生活の状況の描写よりも登場人物の動き、心理により関心があるので、アウシュヴィッツの極限的な状態を描くところは少ない。さらに、幾つかの恐ろしい場面が加害者である看守の眼で描かれている。他の小説家と違って、アウシュヴィッツの悲惨さについては囚人の方からは全く述べられていない。病院（病棟）、長時間の点呼、死のバラックと死の壁などは、リザの眼、つまり驚いている眼、自分が見ている場面を疑っている眼で描写されている。その恐ろしさに直接に参加しない眼、まるで外界の観察者の眼だけで描写されている。

病気のマルタを訪れたりリザははじめて収容所における生と死の間にある

僅かな相違を発見した。まだ病棟にいる重病人と病棟の外にいる死者の違い、あるいは人間が生き物の質を失って<物>として他の生き物（ドブネズミ）のえさになる様子を見た。

初め……本当に初めて病院の構内に入ったんです。病棟という病棟に積み上げられた屍体の山。まっ裸の女の屍体。突き出した鎖骨と恥骨。どの病棟、どの病棟も（略）ふと、そのとき……私の耳に聞こえてくるものがある。ひな鳥の鳴き声に似た音が。嬉しそうに貪り食っているような……あの音が。見るとねずみが……うさぎほど大きな！……毛のつやつやした……ねずみが囁っているの！ おびたしいねずみが死体のあいだを飛びまわっている。

一般の SS 親衛隊員が女囚たちの死体を齧っている<毛のつやつやした>ドブネズミに変身するように読者に感じさせる。彼ら（親衛隊とネズミ）にとって他人の死（死体）は<餌>、つまり<大喜び>をもたらすものとなっている。さらに、収容所の現実の中で、とても現実的なネズミは死と死をもたらす状況も象徴している。これがどこかに現れると、直ちに死が訪れるであろう。あるいはまた別の場面ではドブネズミは、収容所の中で豊かな生活を送る唯一の選ばれた生き物を象徴している。満腹したネズミは空腹の女囚の間で遊んでいる。「おそらく世界中で、あのアウシュヴィッツのねずみほど大きいものはないだろう。パーチカのそばの狭い場所に二十匹ほどいる。」

一般の知識では赤十字は生命を救う組織である。しかし、すでにボロフスキが語ったように、その赤十字の役割が正反対の意味を持つこともあるとポスマイシは書いている。命を救うことではなく、その命を奪うという意味である。リザはアウシュヴィッツに着いたばかりの時、「女看守長」（Oberaufseherin）に案内されて、様々な設備の機能を説明された。「その建物のほうへ次々と赤十字マークのついた運搬車が向かって行った。『病人を運んでいるんですか？』『いいえ、薬品を運んでいるんです。どんな病気にも効く薬をね。（略）いっておく義務がある。あの車は<チクロン B>ガ

スを運んでいるんです』とリザは言われた。〈どんな病気にも効く薬〉とは、健康な人にも効く薬であり、単純に言えば、人を殺す薬なのである。〈赤十字マークのついた運搬車〉、〈薬〉などの人の健康を回復と関係する意味を持つ言葉を、逆の意味を示している〈《チクロンB》ガス〉という言葉と共に並べることは、明らかな矛盾であり、読者にきわめて強い衝撃を及ぼしている。さらに、当時赤十字の持つ役割は何であったのか、という大きな疑問を引き起こしている。

上で指摘したように『バサジェルカ』では収容所の恐ろしさについての場面はかなり少ない。しかし、そのような場面がある場合には、描写の言葉が節約されているにもかかわらず、非常に衝撃的である。病院を訪問するリザは患者たちを観察している。完全に人間の尊厳を奪われた女囚たちの行動は次のように描かれている。「中に入ってみると、またも幽鬼の群れ。今度は生きている幽鬼の群れ。ペーチカにもたれて坐っており、私を見るとみなみななくれようとする。鼻をつくすさまじい悪臭……」もはや人間ではなく、恐がっている野生動物のように見える。しかし、同時に、まだ羞恥心を持つという人間性を示している。自分が腐っているので、女性であるリザに見られることを嫌がり、逃げようとする。

もう一つの問題に注目してみる。アウシュヴィッツに送られた子供たちの問題である。この主題は第七章でナウコフスカの作品について論じる時にも触れるが、ここでポスミシの意見を考察してみる。女性作家であるポスミシはリザという女主人公を通して、母親たちの悲劇を語っている。小説の設定では、リザは戦前に起こったある事故のために子供を生めなくなった。それ故に、彼女はアウシュヴィッツにおける子供たちの悲劇をより敏感に感じている。夫ヴァルテルと話したときに、自分の経験を次のように打ち明けている。

アウシュヴィッツの恐怖のうちで一番驚くべきものは子供たちの殺害だった。ほかのことはすべてこれとは比較にならない。アウシュヴィッツで子供たちに加えられる暴行でさえも。私は見た、乳呑児の

手にナンバーを彫り込む光景を。(略)母親たちの手から赤ん坊を奪い去るのを見た。(略)しがみつくようにしっかりと子供を抱いている母親から、力づくでもぎ取るように子供たちを奪って行く、それも、いつも簡単にいくとはかぎらない。女たちは気の狂った動物のように振舞い、その叫びはその後幾日も幾日も収容所じゅうに響いていた。

リザは、母親から引き受けられた子供たちが<子供たちの家>に送られると確信しているが、ほとんどの場合はその子供たちもガス室で殺された。しかしこの事実を彼女は受け入れたくなかった。子供を持つことを望んでいたリザは、長時間輸送列車の中に閉じこめられた子供たち、「大きい子、小さい子、歩きはじめたばかりの子、裕福に見える子、やつれた子もいたが、みな生き生きして、やっと外に出たので幸せそうになって、浮かれて、周囲を好奇心に満ちた目で見回していた子」<sup>11)</sup>を見て、子供を生めない女として、非常に苦しんだ。しかし、殺されるために運ばれてきた子供たちの運命を考えるより、子供たちの姿を見ることによって、悩み苦しむことになった彼女の心の方が、よりかわいそうであった、とポスミイシの作品を解釈できる。

『パサジェルカ』には輸送列車の到着、乗客の選別、囚人を焼却炉へ送る場面が少ない。また、一般市民より、母親と子の現れる場面の方が多い。ボロフスキの「去って行った人々」に、同様のモチーフがすでに現れていたことが想起される。ポスミイシが描いた次のような短い場面を見てみよう。

新しい貨車が着いたのだ。人びとは静かに歩き、もの珍しそうにあたりを見まわしている。中には、あの歌のメロディーを口笛で吹いているものもある。(略)とてつもなく大きな輸送車……三歳くらいまでの子供をつれて母親たちばかりのように見える。乳母車……乳母車……それらが、どす黒い煙を吐く屍体焼却炉の方に向かって行く。後から後からと……私たちの倉庫にも乳母車が運ばれてきた……空っぽに

11) 佐藤清郎訳はないので、これは筆者の訳である。

なって。

新しい人生が〈あそこ〉（アウシュヴィッツ収容所）で始まるとだまされた人々は、列車から降りて、好奇の眼で周りを見ながら、何も知らずに〈屍体焼却炉の方に向かって行く〉。何も聞かず、無意識のうちに死に向かっていく。ポロフスキのこたばを借りると、彼らは〈去って行く〉。母親たちは小さい子を連れて、その〈新しい人生〉に向かっていく。それからは、リザのコマンドに仕事が増えるだけである。冷静な目で考察される場面は、死に向かっていく人々の苦しみを全く表現しない。ここでの描写はポロフスキの描き方にとっても似ていると思われる。実際には、ポロフスキとポスミシシの主人公たちは極端に違う立場に立っているが、その二人の主人公は〈去って行く〉人たちの死を無関係な人の目、また外の人の目で見ていく。このような語り口では、作家（主人公）の叫び声、嘆き声は、より衝撃的であると思われる。

## お わ り に

60年代に書かれた『パサジェルカ』には、社会主義的なプロパガンダの要素が見られ、アウシュヴィッツにおける罪の問題があまりにも簡単に描写されていて、あらゆる戦争責任がナチス・ドイツの方にあるかのように書かれているという評論家の意見が最近はある<sup>12)</sup>。しかし、筆者は彼らの評価にあまり賛成しない。10年、20年経っても、強制収容所の囚人たちの心の傷はそんなに簡単に癒せないし、収容所のテーマを取り上げるたびに、全く中立の立場を取り、敵国に対して全く怒りを持たないという角度から作家たちが書くことはあり得ないであろう。普通は人間にとって、自分に与えられた恐ろしい敵の行為を許すことは、大変難しいことなのである。さらに、キリスト教信者であるポーランド人にとっても、相手の犯罪を許

12) Piotr Kuncewicz『ポーランドの現代作家の事典、第二巻』（Leksykon polskich pisarzy współczesnych, T.2）GRAF-PUNKT, Warszawa, 1995による。

さなければならないという聖書の教えがあるとはいえ、いくらこれを忘れようと努力しても、許そうとしても、やはりほとんど不可能であると思う<sup>13)</sup>。

ポスマイシは収容所における生活の条件を細かく描写することより、作品で登場している人物の性格の分析に重点をおく。戦争直後に書いたのではない作家にとっては、確かに正確にすべての詳細を復元することは無理であったと思われる。それ故に、ポスマイシは時の流れと共に、つまり戦後から十数年が過ぎたあとに、収容所における自分の立場を細かく分析してみた。本論の冒頭で述べたシュマグレフスカとコッサクは自分の作品をほとんど終戦と同時に書いた。なるべく早くアウシュヴィッツに関する情報を伝えたかったからであろう。さらに、強制収容所というテーマばかりを選んで、自分の経験に基づいて長編小説を書くのは、確かに想像力を超えるほどの大変なことである。(『アドリア海の夏休み』はそれである。) さらに、戦争直後アウシュヴィッツについて書くことができなかったポスマイシは、十数年後、落ち着いたとき、再びアウシュヴィッツのことを思い出して書くことにした。なぜであろうか。彼女は自分に課せられた使命のように、毎年アウシュヴィッツの元囚人たちと出会う。その結果、彼らの代表となりいくつかの小説と物語を書くことに決めたとと思われる。体の傷がほとんど癒えても、心の内の最も恐ろしい傷が癒えることは決してないままにその作品を書いたのである。

彼女の三つの作品のうち、収容所について加害者の立場から語るという独創性のために、確かに『パサジェルカ』は最も優れた作品である。しかし、当時の事実をきわめて写實的に描いているという点においては「ザンゲリン」の方が歴史的価値を持つ。また、アウシュヴィッツにおける自分の立場、そして他の囚人に対する行動などを現在の立場から分析する『アドリア海の夏休み』の方が、〈過去の清算〉の小説の一つとして価値がある。

---

13) 許せるかどうかという問題は「収容所文学」でも、日本の「原爆文学」でも頻繁に出てくるのである。



引用文献

Posmysz, Zofia „Pasażerka. Wakacje nad Adriatykiem”, Czytelnik, Warszawa 1980.  
『ポーランドと戦争文学—「パサジェルカ」他』（アンジェイェフスキの「聖週間」,  
グロホヴィヤクの「牙関緊急＜新衛隊員の手記＞」, ポスムイシの「パサジェル  
カ＜女船客＞」, 東欧の文学7, 恒文社, 1973。

参考文献

Burkot, Stanisław „Proza powojenna 1945–80”, Wydawnictwa Szkolne i Pedagogiczne  
(WSiP), Warszawa 1984.  
Czaplejewicz, Eugeniusz „Polska literatura łagrowa”, PWN, Warszawa 1992.  
„Wspomnienia więźniów obozu KL Auschwitz”, opracowanie Jadwiga Mateja, Teresa  
Świebocka, Państwowe Muzeum w Oświęcimiu 1995.

## Summary

### Literary Testimony of a Polish Female Writer, Zofia Posmysz, the Survivor of the Concentration Camp in Auschwitz

Urszula Styczek

As a continuation of the discussion on how the Concentration Camp in Auschwitz was described by Polish writers, in this paper I will focus on another female writer who survived it, but began to write 17 years after the end of the Second World War. Compared to the previous writers' literary works I wrote about, her novel, "Passenger" ("Pasazerka") is closest to fiction, but still based on the tragedy of Auschwitz. I will shortly present her life and literary activity, as well as her two other famous works on Auschwitz, a short story entitled "Singer" ("Sangerin") and "A Holiday on the Adriatic Sea" ("Wakacje nad Adriatykiem"). Then, I will discuss some main issues in the novel "Passenger" such as the relationship between two women, a German, Liza Kretschmer and a Pole, Marta. These two women are unexpectedly meeting again, ten years after the war, on a passenger ship. The previous concentration camp warder and the assailant in those days, Liza accidentally meets her victim, Marta, the previous prisoner. Their relationship somehow reverses; now Liza feels that she is the victim, or she stands in a weaker position than Marta, because Liza has to hide herself and runs away from Europe. The novel is narrated in two periods of time, one in the present time, ten years after the war, the second in the past, during the Auschwitz imprisonment. What is interesting in this novel is the fact that the Auschwitz period is seen and narrated by Liza, the

Urszula Styczek：アウシュヴィッツ収容所の生存者が語る

assailant, though Posmysz knew the life in Auschwitz only from the victim's position. One more issue addressed in this novel is “the tacit agreement of the Auschwitz tragedy” and “expiation of this crime” widely discussed by the writer. Finally, after Posmysz, I will present some aspects of every day life in Auschwitz.